

金城学院大学におけるキリスト教教育の歩み — 時代背景との関わりで —

The Path of Christian Education at Kinjo Gakuin University,
mostly related to Historical Context

落 合 建 仁 *

Kenji OCHIAI

キーワード：①金城学院 ②キリスト教教育 ③建学の精神 ④聖書科

論文要旨

本稿の目的は、2016・2017年度のキリスト教学校教育同盟教育研究委員会テーマをふまえ、金城学院大学におけるキリスト教の営為について、その歴史を紹介することである。特に、金城学院と社会との関わり、そして、どのような祈りが学院の中で紡ぎ出され、また悔い改めを迫られた歩みであったかを明らかにする。そのために本稿は、まず金城学院大学全体についての概要を述べ、あわせて同大学のキリスト教の営為が現時点でどのように行われているかを記す。その後、そのような現状に至った経緯を知るべく、金城学院創設期以来のキリスト教の営為を概観する。

* 金城学院大学文学部宗教主事・准教授

1 はじめに

主題設定の理由 本稿は、2016・2017年度のキリスト教学校教育同盟教育研究委員会テーマ「時代の担い手としてのキリスト教学校——共に喜び、共に泣く——¹」をふまえ、「時代と共に——キリスト教大学の祈りと歩み——」をテーマとして開催されたキリスト教学校教育同盟関西地区協議会第60回大学部会研究集会（2016年9月1日）において、＜金城学院大学の祈りと歩み＞を基調に金城学院大学の歴史を概観する中で、過去同大学にどのような祈りと歩みがあり、そして今後どのような祈りの課題のもと歩んでいくものであるかを探って講演発表したものを、文章化したものである。

そのために本稿の進め方としては、まず、金城学院大学全体についての概要を述べ、あわせて同大学のキリスト教の営為（具体的には礼拝、授業等）が現時点でどのように行われているかを記す（特記の無い限り、本稿では「大学」という用語を、短期大学部〔1950年開設、2003年閉学〕も含んだものとして使用）。その後、そのような現状に至った経緯を知るべく、金城学院創設期以来のキリスト教の営為を概観して行く。その際には、学院と社会との関わり、そして、どのような祈りが学院の中で紡ぎ出され、また悔い改めを迫られた歩みであったかを知ることができるであろう。

資料について なお、このことについて述べるにあたって使用する資料について一言^{いちげん}しておく。金城学院においては、学院の歴史を伝える学院史・記念誌の類は比較的良好に整えられていると思うが、意外なことに、キリスト教の営為について特に焦点をあてて記した文章・冊子は無く、本稿が扱うところの、大学のキリスト教教育の歩みについて記した文章も同じく実

¹ 2016・2017年度教研テーマ「時代の担い手としてのキリスト教学校——共に喜び、共に泣く——」については、『キリスト教学校教育』第691号、2016年3月号を参照。

質無かったと言ってよい²。よって、本稿は、従来の学院史からキリスト教の営為に関する記述を参照すると共に、それに加えて、筆者自身が大学キリスト教センターに所蔵されている種々の第一次史料を参照して記したものである³。

それにしても、1949（昭和24）年に金城学院大学が設立されてから今日まで、70年近くという半世紀以上を優に超す時が経とうとしている。その歩みをキリスト教の営為に絞るとは言え、本稿だけで全て網羅することは到底できることではなく、どうしても限定的な記述にとどまざるをえないことをご容赦願いたい。しかし、これまでに類書が無かったゆえ、本稿が今後、金城学院大学のキリスト教教育の歩みについて、より深く検討をする際の足掛かりに少しでもなれば幸いであると願いつつ、主要なものはできるだけ取り上げようとした次第である。なお、本稿は、筆者個人の手になるものであり、学院史・記念誌の類のような公的な性格を持つものではないことを付記しておく。

2 金城学院大学キリスト教教育の概要

本章では、金城学院大学のキリスト教教育の概要の現状を紹介する。現状紹介の前に、金城学院大学の沿革を述べねばならないが、その際、大学設立時からさらに遡って、金城学院の創立期から沿革を述べることとする。なぜならば、金城学院大学の建学精神は、学院創立期にその源流を持っているはずだからである。

² 真山光彌「開会礼拝」、『1995年度 第26回金城学院大学教員聖書研修会報告書』金城学院大学キリスト教センター委員会、2-6頁が唯一のまとまった文書か。

³ よって、文献史料に依拠してまとめたものであり、当時を直接知る人からすると、誤解のある記述もあるかもしれない。その点についてはご容赦、あるいはご教示・ご指摘いただければ幸いである。

2. 1 金城学院の沿革と大学の現状

沿革 金城学院は、1889（明治22）年、米国南長老教会ミッションの宣教師、アニー・ランドルフ（1827-1902）によって誕生した「女学専門^き冀^き望^{ぼう}館」を前身に持つ。翌年私立金城女学校に名称変更⁴、1915（大正4）年、省令に基づく高等女学校となった。1927（昭和2）年には、金城女子専門学校が中部地方で最初の女子専門学校として設立された。同時に、この年

⁴ 「金城」という名称の由来は何であるか——本発題の主題とは直接関連は無いが、しばしば尋ねられるので以下備忘的に記しておく。金城学院、すなわち金城女学校の「金城」の由来は、1915（大正4）年に行われた創立25周年新校舎落成文部省指定祝賀会の「記念植樹の辞」（たぶん、校長シャーロット・タムソン）の中で、「ランドルフ教師主の名によりて当校を設立し、黄金の如く輝きて城の如く堅かれと、金城女学校と命名せられてより」と説明されているのが唯一の証言である（発行兼編集人三浦常彌『みどり野』第5輯、金城女学校校友会発行、1916年10月15日発行、41頁）。また、同祝賀会において、「名古屋城下、金城ノ名ヲ負ヒテ立テル学ビ舎」（金城女学校卒業生総代林ゆき「祝辞」）、「米国宣教師ランドルフ夫人の手により本校が金城々下堅杉町のあたりに始めて呱呱の声をあげし」（在校生徒総代第三学年梅本愛子「祝辞」）といった言葉が見られるように、「金城」という言葉は名古屋城を意味するものであり、そこから採られたと理解している者が多かったであろうことが分かる（名古屋城が「金城」と呼ばれた次第については、名古屋市教育委員会編集兼発行『名古屋叢書続編第十三巻 金城温古録（一）』1965年、61-63頁を参照）。ランドルフが開設した女学校の最初の所在地は名古屋市下堅杉町54番戸（現在の名古屋市東区東桜1丁目3番地付近）であり（白壁4丁目（現在地）に校舎を移築したのは1900（明治33）年）、よって、後代では「金城」という名称について、「学校の所在地から望む、名古屋城の金の鯨からの意味と、『ゴールデンキャッスル』の言葉の中に、世に輝け、城の如く堅く、強くあれという祈りがこめられて命名されたものと思われます」との解説がなされ、言い伝えられることとなる（金城学院創立百周年みどり野会事業委員会文集実行委員会編『金城学院創立百周年記念文集みどり野』金城学院創立百周年みどり野会事業委員会発行、1989年発行、19頁）。なお、ランドルフと同じ南長老教会宣教師C・K・カミングによって設立された旧日本基督教会の講義所に遡る歴史を有する、日本基督教団金城教会の「金城」は、1906（明治29）年に飯田町講義所が「金城伝道教会」と改称して以来であるが、その由来については教会の年史等には記されておらず、「金城教会草創期—自給独立を目指して—」（『金城学院大学論集人文科学編』第27巻、1994年所収）を著した「真山光彌先生が徹底的に調べたけれども、確かなことは分からなかった」（西野友英金城教会長老談）という。その上で、関連があるかもしれないこととして、「[1893（明治26）年頃]の〔金城女〕学校は、全く宗教的雰囲気包まれており、名古屋教会、金城教会（当時飯田町講義所）とは創立当初から密接な関係が保たれ、全生徒が日曜毎にその礼拝に参加した」という記録があることを付記しておく（佐藤裕編『金城学院六十年史』金城学院市村興市発行、1949年、10頁）。

から、経営がミッションから離れて財団法人金城女学校の手に移り、ミッション・スクール⁵からクリスチャン・スクールとなった⁶。1947(昭和22)年、学制改革により金城学園中学校が設立され、翌年には、金城学院高等学校が設立されると同時に、経営母体が財団法人金城学園から学校法人金城学院になった。

金城学院大学は、1949(昭和24)年に英文学部の単科大学として設立された。これまでに5学部(薬学部含)を有する大学として発展し、優れた卒業生を輩出することで、名古屋地区の代表的女子大学として存在感を示している。学生数は大学(学部・大学院)で5,426人、幼稚園・中学校・高等学校を含めると合計7,657人である(2014年5月1日現在)。この数は一法人あたりのキリスト教主義女子総合学園としては、国内最大である(キリスト教主義女子大としては2番目)。学院専任教職員のキリスト者比率は

⁵ ミッション・スクールとは、「極めて広義にキリスト教主義学校を指して一般に用いられているが、本来的には宣教師として遣された人々が伝道の一方法として、キリスト教精神による教育を行う学校。したがって外国の伝道会、修道会または外国教会の伝道局(Mission Board)により人的・財的に経営されるものをいう」(海老沢有道「ミッション・スクール」、日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、1360頁)。ここでは、本来的な意味の用語として使用している。

⁶ 財団法人金城女学校寄附行為第11条によると、日本人理事も外国人理事も、日本基督教会大会の信仰告白を承認するもので、全員長老の按手礼又は教職の按手礼を受けていなければならなかった。よって、金城女学校の管理権が、ミッションから日本基督教会大会に移行したとも言うことができる(金城学院百年史編集委員会編『金城学院百年史』金城学院、1996年、243-244頁。また『2003年度 金城学院大学自己点検・評価報告書』金城学院大学、1頁)。例外ではあるが、「金城学院が、いわゆるミッション・スクールからキリスト教主義学校に変わったのはいつであるか。→昭和23年と思ってよい。つまり教育基本法が実施され、経営的にも、また他の運営面においても、自主的になった時代である」との記録があることも付言しておく(『1981年度 第12回金城学院大学教員聖書研修会報告書』金城学院大学キリスト教センター委員会、6頁)。なお、金城女学校が「ミセス・ランドルフの学校」「ミス・ヒューストンの学校」から、ミッション年会で選出された3人の理事によって運営されるミッション・スクールとなったのは1903(明治36)年9月のことである(『金城学院百年史』120-121頁)。

図の通り（『2015年度 金城学院キリスト教活動報告書』金城学院キリスト教センター委員会，8頁）。

建学の精神 金城学院の建学の精神は，1967（昭和42）年に当時の近藤武一理事長兼学院院长によって，「学院教育の三本柱」として具体化されたと言うことができる。すなわち，「福音的キリスト教にもとづく女子教育」「全人的な一貫教育」「国際理解の教育」である。キリスト教精神に基づき，女性の教養教育と専門教育を教授することを通して，国際的に活躍できる人材を育てることを謳っている。この「学院教育の三本柱」は現在，金城学院大学の共通教育科目「建学の精神を学ぶ科目（金城アイデンティティ科目）」における3テーマ，「キリスト教」「女性」「国際理解」として反映されている（後述する「キリスト教学」の項を参照）。

建学の精神に関連して，現在の「学校法人金城学院寄附行為」には「第3条 この法人は，福音主義のキリスト教に基づき，かつ教育基本法及び学校教育法並びに私立学校法に従い，教育事業を行うことを目的とする」が，「金城学院大学学則」には「第1条 本学は，福音主義のキリスト教に基づき，学校教育法にのっとり，女性に広く知識を授けるとともに，深く専門の学芸を教授研究し，もって真理と正義を愛し，世界の平和と人類の福祉に貢献する人物を養成することを目的とする」がある他，1994（平成6）年には学院スクールモットー「主を畏れることは知恵の初め」（旧約聖

Ⅷ 専任教職員宗教調 (2015.5.1)

区 分	人数	信者数			百分率 (%)
		男	女	計	
大学	1	1	0	1	100
大学院・文学部	47	8	0	8	17
大学院・生活環境学部	30	1	2	3	10
国際情報学部	24	0	0	0	0
現代文化学部	0	0	0	0	0
人間科学部	41	4	3	7	17
薬学部	32	1	0	1	3
研究所・センター等	3	2	0	2	67
大 学 計	178	17	5	22	12
高等学校	51	16	16	32	63
中学校	39	13	14	27	69
幼稚園	8	0	4	4	50
教 職 計	276	46	39	85	31
助教	18	0	1	1	6
事務職員	111	19	4	23	21
総 計	405	65	44	109	27

*役員である理事長は含めない。

書「箴言」第1章7節)を制定、その後、大学がどういう学生を育成したいかを表す言葉として、2005(平成17)年には教育スローガン「強く、優しく。」を制定した。なお、いわゆるクリスチャン・コードの変更については、2008(平成20)年度に、キリスト者条項に係る寄附行為の一部を変更(キリスト者によらない理事の上限2名を3名に拡大)したのが今のところ最後である⁷。

2. 2 金城学院大学のキリスト教教育の現状

それでは以下からは、金城学院大学におけるキリスト教の営為、特にキリスト教教育の現状がどのようなものであるかを記したい。本学キリスト教教育の内容として、大学キリスト教センター発行の冊子『金城学院大学とキリスト教〔2016〕』⁸に従って、次の三本柱を掲げるのが適切であろう。

⁷ 金城学院周年記念事業委員会編『DOUBLE JUBILEE 120/60 金城学院創立120周年・金城学院大学設立60周年』2009年、43頁。

⁸ 現在、大学キリスト教センターが発行している印刷物として、たとえば次のようなものをあげることができる。(1)『金城学院大学とキリスト教』は、大学のキリスト教活動等について記された冊子で、毎年新入生全員に配布されている。当初はリーフレット形式であったが(1960年のものが確認できる最古)、1973年から現在のような冊子形式になった。(2)『金城台』は、現在、年に3回発行されている機関紙。その使命と「金城台」の名称由来については以下の通り。「キリスト教伝道、研究、広報等多目的の機関紙を出そうと当時の宗教課において決定した。機関紙名は広く公募したが、私〔富田望〕が応募した「金城台」が採用され今日にいたっている」(富田望「『金城台』信仰、希望、愛」、『金城台』第100号、1975年12月10日)。1957年創刊。なお、編集・発行の主体は、第1号(昭和32年4月21日)～第77〔本当ならば78であるべき〕号(昭和45年12月10日)は「編集兼発行人吉岡千里、金城学院大学内金城台編集委員会発行」、第78〔本来ならば79であるべき〕号(昭和46年2月5日)～第83号(昭和47年4月10日)は「『金城台』編集委員会編、金城学院大学宗教センター発行」、第84号(昭和47年6月10日)～第87号(48年2月10日)は「『金城台』編集委員会編、金城学院大学宗教センター発行」、第88号(昭和48年4月10日)～第127号(1981年6月10日)は「『金城台』編集委員会編、金城学院大学宗教センター委員会発行」、第128号(1981年10月10日)～現在は、「『金城台』編集委員会編、金城学院大学キリスト教センター委員会発行」である。以下、本稿において引用典拠として『金城台』を記す場合は、編集・発行の主体についての記述は省略する。(3)『クロニクルス』は、年に2回発行され、礼拝と行事予定、キリスト教センター所属

すなわち、①「礼拝」、②「キリスト教学」、③「『キリスト教の時間』」である。

大学礼拝 まず①についてである。キャンパスの中心に位置するエラ・ヒューストン記念礼拝堂（2014年献堂）で、「朝の礼拝」が8時45分から9時00分まで（授業は9時10分開始）、授業・試験期間中毎朝行われ（土、補講日を除く）、「昼の礼拝⁹」が12時50分から13時05分まで（昼休み時間中）、同期間の木曜日に行われている。また、礼拝強調週間として「春の伝道週間」と「秋の伝道週間」が、それぞれ5月と11月の一週間、毎朝・昼礼拝が行われている。説教・奨励は主として宗教主事¹⁰、そして近隣の牧師・伝道師（主として日本基督教団¹¹）、学内のキリスト者教職員によって担われている。また、役職者にも、キリスト者である・なしに関わりなく協力を要請する場合がある。

礼拝は全学生・教職員に開かれているものであるが、出席している学生のうち、98.1%は1年生である（2015年度）。というのは、1年生の必修授

クラブの紹介等が記されている。2009年創刊だが、かつての『センターニュース』（たぶん第114号〔1998年12月・1999年1月〕が最後）とよく似た紙面構成である。他に礼拝説教集等がある。

⁹ 「昼の礼拝」は、「特に遠距離のため『朝の礼拝』に出席できない学生に対して行われている」ものである（『1987年度 第9回 金城学院キリスト教科目担当教師研修会報告書』金城学院宗教主事会、12-13頁）。なお、本報告書には、「昼の礼拝」は、1987年度後期から「讚美歌をうたう会」に代えて行われたとの記録があるが、礼拝の予定等を記した『Center News』（金城学院大学キリスト教センター）紙上では、第71号（1988年4、5月）が初出である。

¹⁰ 宗教主事とは、宗教主事規程第9条において「所属する学校又は学部の長を補佐し、その学校又は学部の学生、生徒、幼児及び教職員に対する宗教活動（宗教行事およびキリスト教科目の授業）を総括する」と定められており、その役割は、大学では、キリスト教学の担当、キリスト教センターでの宗教活動およびキリスト教文化研究所での研究活動が主なものとなっている（『DOUBLE JUBILEE 120/60 金城学院創立120周年・金城学院大学設立60周年』112頁）。

¹¹ 金城学院は日本基督教団関係学校（詳細は教団教規施行細則第7条を参照）であるが、学院の理事会が、教団の関係学校であることを内外ともに明確にしたのは、1964（昭和39）年11月4日に開催された学院創立75周年記念式典での大村勇教団総会議長の公式発言と、1965（昭和40）年5月21日に開かれた定期理事会での承認によってである（『金城学院百年史』598-599頁）。

業である「キリスト教学（1）」（後述）の第1回目レジュメ（2015年度）に、「大学礼拝は前後期各10回出席すること。10回以上出席した場合、成績評価時に反映される場合がある。……」と記されているからである¹²。2015年度の日平均の礼拝出席者数一覧は以下の通りである¹³。

1 朝の礼拝

期 日 授業期間・定期試験期間（月～金曜日） 8時45分～9時00分
場 所 エラ・ヒューストン記念礼拝堂

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	年度	昨年度
学 生(平均)	256	189	110	87	50	124	123	100	73	64	118	106
教職員(平均)	24	31	30	34	45	31	36	30	35	35	34	31

2 昼の礼拝

期 日 授業期間・定期試験期間（木曜日） 12時50分～13時05分
場 所 エラ・ヒューストン記念礼拝堂

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	年度	昨年度
学 生(平均)	43	98	37	58	-	48	43	90	56	57	59	73
教職員(平均)	6	7	4	8	-	6	7	9	8	8	7	7

キリスト教学 次に②「キリスト教学」である。本学の共通教育科目に「建学の精神を学ぶ科目（金城アイデンティティ科目）」があり、これは、前述した「学院教育の三本柱」を、「キリスト教」「女性」「国際理解」の3テーマとしてまとめたものである。その中でも、「キリスト教学」は、全1年生の前・後期で4単位必修の授業となっており、この授業については、できるだけ専任教員としての宗教主事が担当することが望まれる性質のものであろう。内容は、シラバス上では各教員共通のもので、前・後期を通じて旧・新約聖書とキリスト教史等を学ぶことになっている。

なお、「建学の精神を学ぶ科目（金城アイデンティティ科目）」の「【テーマ1】キリスト教」には、必修の「キリスト教学」以外に、キリスト教関連科目（11種類）が開講されている。幅広い分野が提供されていて、担当

¹² なお、2016年度配布のレジュメには、「毎日の礼拝は、できる限り出席すること（毎回出席をとる）／出席回数は成績評価時に反映される場合がある」と記されている。

¹³ 『2015年度 金城学院キリスト教活動報告書』12頁。

教員は、専任・非常勤、キリスト者（教職者、信徒）・非キリスト者と、様々である。開講対象学年は1・2年生のみであり、他のキリスト教主義大学に見られるような、さらにキリスト教を学びたい上級学年を対象とするような段階的開講の形とはなっていない。よって、聖書の開き方がままならない状態で、キリスト教関連分野について教えること・学ぶことの難しさもないわけではない。

【テーマ 1】キリスト教

開講科目	*赤字は必修科目
キリスト教(1)	医療とキリスト教精神
	福祉とキリスト教
キリスト教(2)	キリスト教文化学入門
聖書の読み方	音楽とキリスト教
聖書の女性観	美術とキリスト教
キリスト教と日本	文学とキリスト教
現代世界とキリスト教	いのち・こころ

(『2017大学案内』143頁)

「キリスト教の時間」最後に、③についてである。「キリスト教の時間」とは、キリスト者として各方面で活躍されている方々をお招きして、講演や演奏会を聴く機会の呼称である。現在、年に2～3回ほど開催され、全学生と教職員に開かれているのはもちろん、機会によっては学外からの参加も可能な場合がある。

3 金城学院のキリスト教の歩み ―― そこには祈りがあった

以上、金城学院大学のキリスト教教育の現状を概観した。第3章では、その現状に至るまでの、金城学院のキリスト教の営為の歩みを概観したい。なぜならば、そのことを通して、なぜ如上のような現状へと至り、またその現状をより良く発展させるには一体何が必要であるかが、浮かび上がってくると考えられるからである。

3.1 宣教師たちの祈り

アニー・ランドルフ 金城学院は、前述したように、アニー・ランドルフ宣教師と協力者によって1889（明治22）年に設立された。彼女は当初、

中国で16年間女子教育に従事していたものの、健康を害してしまう。そこで、病氣療養を兼ねて母国に帰国する途中、日本に立ち寄ったのだが、それが本学院設立の契機となったのである。9月9日、女学専門^{きぼう}冀望館は開校され、最初の生徒は3人の女生徒（星野静枝、榑崎とし、坂野だい）であった。開校直前、ランドルフが、本国の安息日学校（日曜学校）の生徒たちへ訴えた内容の手紙で、外国伝道局に書き送ったものに次のような言葉がある。

さて、この可愛い少女〔星野静枝〕についてお話ししましょう。ミセス・フルトンと私は、神が彼女の心を変え、彼女を有能なクリスチャン・ワーカーにしてくださることを期待しながら、育て教育するために彼女を預かりました。彼女の父親は、名古屋の弁護士で、自分は、クリスチャンではないのですが、娘がクリスチャンになることを願っています。私たちは、彼とその家族が静枝と同じようにキリストに導かれるよう、大きな期待を抱いています。神の御霊だけが彼女の心を変え、神への奉仕にその生涯を献げる備えがお出来になります。……どうか、神が今、彼女に新しい心を与え、彼女の将来の偉大なライフワークのために、正しく訓練が受けられるように祈ってください。¹⁴

神を畏れ、神への奉仕にその生涯を献げる、つまり、人を愛することをライフワークとする女性の育成——それが、ランドルフの教育方針であり祈りであった¹⁵。ここに金城学院の建学の精神の源流があると言えよう。

翌年、校名を「私立金城女学校」に変更し（以降、名称は幾多の変遷を

¹⁴ Randolph, Annie E., "LETTER FROM MRS. RANDOLPH" in *The Missionary, October 1889*, p. 393. 金城学院大学蔵（『金城学院百年史』73頁に、真山光彌による日本語訳がある）

¹⁵ 真山光彌『金城を支えた人々』金城学院キリスト教文化研究所、1995年、9頁。

経るため、本稿では以下から、ただ「金城」と記す場合がある)、その教育目的を「基督教に依りて徳性を涵養し、教育勅語の御趣旨を實踐せしむるを以て徳育の主義となす」とした¹⁶。毎朝礼拝が行われ、その礼拝は、讚美歌、聖書朗読、祈禱、主の祈りで終わるものであった。その後、英語等の授業が行われ、毎日午後2時から有志のバイブルクラスが、クラスに分けられて行われていたという¹⁷。

エラ・ヒューストン 現在発行されている学院報には、2003(平成15)年から『with Dignity』という名称が冠されている¹⁸。この名称の由来となるのが、第6代校長のエラ・ヒューストン(1864-1912)である。ピューリタンの家庭で育った彼女の教育方針は厳格であったと伝えられる。たとえば、生徒が外出する際には、彼女の部屋をロックして、許可を得なければならなかった。その時に、彼女は「必ず生徒の両の肩に手を置かれ“You must have dignity!”と語気を強めて言われた」という¹⁹。“dignity”とは尊厳・品位の意で²⁰、学院報のみならず、金城学院中学校・高等学校の総合学習

¹⁶ 『金城学院六十年史』8頁。ただし、この言葉がそのまま制定された当時に遡るかは、以前から疑義が抱かれている(真山光彌『愛知のキリスト教』新教出版社、1992年、231-232頁)。

¹⁷ Randolph, Annie E., “FOR THE YOUNG” in *The Missionary, July 1890*, p. 266. (『金城学院百年史』78-79頁に、真山光彌による日本語訳がある)

¹⁸ 『金城学院報』は2002年度に、第70号をもって廃刊された。

¹⁹ 『金城学院六十年史』8頁。

²⁰ “dignity”の意味について、たとえば、金承哲「ウィズ・ディグニティ」(『金城台』第233号、2007年12月1日)は次のように解説を加えている。「『ディグニティ』という言葉の語源は、尊厳、品位、権威、カリスマなどを意味するラテン語のdignitatisです。その中で例えば『カリスマ』とは、神からあたえられる力であり、人間があえて逆らうことができない、圧倒的なパワーのことです。ゆえに、人間の尊厳には、ある権威や力やカリスマをとまなうものであり、その権威や力というのは、単なる人間的な次元のものではなく、神から与えられたものである、ということになります。／このように、尊厳という概念は、人間をはじめすべてのものが神によって造られ、生まれたものである、という、キリスト教的信仰と切り離せない意味関係をもつものです。一人一人の人間には、神から与えられた、先天的な尊厳や価値があるものです。ある一人の尊厳を他の人間の尊厳と比べて優劣を測ったりするのは許されないわけであります」。

の時間「Dignity」の由来にもなっている²¹。なお、従来よく知られている彼女のこの言葉には実は続きがあり、“You must have dignity, not pride.”と
言っていたのが正確なようである²²。

ヒューストン在任中の1903（明治36）年9月、金城女学校は「ミセス・ランドルフの学校」「ミス・ヒューストンの学校」から、在日本ミッション年会で選出された3人の理事によって運営されるミッション・スクールとなったが、ミッションのメンバーには、金城女学校の管理運営について意見の不一致があった。一つは、聖書の授業が必修か自由かという問いであり、他は、キリスト者ではない専任教師の採用問題であった。前者については、聖書を必修とすることで、後者については、万止むを得ない場合はキリスト者でない教師を採用することで解決した。ランドルフ時代のバイブルクラスは有志だけ、オナ・パタソン（ランドルフの後継者）時代は必修とされたが、金城女学校がミッション・スクールとなった時、ミッションは、聖書を必修にするという明白な方針を打ち出したのであった²³。

ところで、ヒューストンの名が、本学院の歴史において〈祈りの人〉として特に刻まれることとなったのは、次のいわゆる「^{ちきゅうせつ}地久節不敬事件」においてである。

²¹ 建学の精神具現化科目である「Dignity」については、深谷昌一「金城学院中学校・高等学校(名古屋)の試み——建学の精神の具現化」, 日本キリスト教教育学会『キリスト教教育論集』第19号, 2011年, 116-123頁等を参照。

²² 「従来伝えられてきた言葉は、“You must have dignity.”でしたが、それに“not pride”がついていたことを知ったのは、ヒューストン先生の愛弟子・丸山みね、結婚して川喜多みねになりましたが、彼女の長女・川喜多道さんの私〔真山光彌〕宛ての手紙でありました。彼女によると、ヒューストン先生は、事あるごとに、“pride”ではなく、“dignity”が大切だ、と語ったといわれています。そして、川喜多道さんによると、これが彼女の母の教育方針でもありました」(金城学院宗教主事会編『1997年度 第19回金城学院キリスト教科目担当教師研修会 報告書』金城学院大学内金城学院宗教主事会, 1998年, 20頁)。

²³ 『金城学院百年史』122頁。

3. 2 社会との関わりで

地久節不敬事件 「地久節不敬事件」とは、1908（明治41）年5月28日に生じた、金城が社会との摩擦を生じさせた最初の一大事件である（なお、1899（明治32）年に発令された文部省訓令第12号²⁴は、金城について言えばあまり影響を与えなかったようである²⁵）。当時、皇后の誕生日は「地久節」と呼ばれていたが、この祝賀式の時²⁶、金城女学校では「君が代」のかわりに「讃美歌」を歌い、「教育勅語²⁷」のかわりに「聖書」を読んだということが内部告発によって新聞『新愛知』（現在の中日新聞の前身の一つ）で取り上げられ、約3週間にわたって連日厳しい批判を受けたのである²⁸。

²⁴ 宗教教育を禁じる法令で、宗教教育を継続する場合は各種学校とみなされ、上級学校への進学や徴兵猶予といった文部省指定校の特典を剥奪された。

²⁵ そう判断する理由として、金城が高等女学校令にも文部省訓令第12号にも抵触しない各種学校として、私立学校令による女学校経営を考えていたこと（『金城学院百年史』115頁）、そして、当時の私立金城女学校の生徒数が、1899（明治32）年60名、1900（明治33）年60名、1901（明治34）年62名というように、増減の大きな変化が見られないことが挙げられる（真山光彌「金城学院における一貫教育——伝統の継承をめぐって——」、『1983年度 第5回金城学院キリスト教科目担当教師研修会報告書』金城学院主事会、9頁）。ちなみに、関連法案によって取り締まるべき対象として警戒されていたのは、プロテスタントではなく実はカトリックであったことは興味深い（高橋昌郎「明治三十二年改正条約実施とキリスト教界」、中央大学人文科学研究所編『近代日本の形成と宗教問題』中央大学出版部、1992年、317-319頁）。

²⁶ 天皇の誕生日を奉祝するならば、皇后も同様にすべきであるという提案が1880年代末にキリスト教界にも生じ、その背景から、地久節は国家の祝祭日ではなかったものの、この頃には各地の女学校でその祝賀会が普及していったという（土肥昭夫「近代天皇制とキリスト教 帝国憲法発布より日清戦争まで」、富坂キリスト教センター編『近代天皇制の形成とキリスト教』新教出版社、1996年、300頁以下）。

²⁷ なお、金城は当初から教育勅語については親和的であり、そのことは、資料によって確認される最初の教育勅語奉読が、1894（明治27）年6月29日に举行された第1回卒業証書授与式で既に行われていたことから分かる（『扶養新聞附録』1894（明治27）年7月1日）。地久節事件直前の1908（明治41）年3月27日の第14回卒業証書授与式においても、君が代の斉唱と教育勅語の奉読はあった（『扶養新聞』1908（明治41）年3月28日）。以上、真山光彌『愛知のキリスト教』232頁より。

²⁸ この事件の詳細については、真山光彌「金城女学校と教育勅語」、『愛知のキリスト教』231-268頁。

批判が沈静化するまでの間、教師も生徒も学校に来なくなりました。時の教頭がその責任をとって退職したが、この時ヒューストンとはいうと、卒業生で当時教師だった阪野はると丸山みねの3人で毎日礼拝と祈祷を続けていたと、後に礼拝の奨励における例話を通じて伝えられている²⁹。ランドルフ時代から毎日行われてきた礼拝の精神は、ヒューストン時代のこの苦難にあって深化されたのであり、現在、幼稚園、中学校、高等学校、大学（1971年以降、大学礼拝堂の名称にはヒューストンの名が冠せられている）で日々献げられている礼拝は——礼拝の形式は多少異なろうとも——この時の精神を受け継いでいるのである³⁰。また、学校に来ることのできなかった生徒たちの中にも、祈る生徒たちが確かにいたことも付記しておきたい。事件を直接経験した卒業生が、次のような証言を残している。

学校は休校の有様で寄宿生も近くの方は帰省しました。私の郷里は土佐でしたが、遠くから来た生徒たちは二、三人、或いは五人と集まって神に助けを求めて祈りつづけました。金城教会の松本〔顕二〕牧師が時折私共の仲間に入って共に祈り続けて下さいました。「皆様と一緒に騒いでは火に油をかけるようなもの」とさとされ、感じ易い乙女心の動揺を防ぎ止めるのに努められました。私達が落ち着きを取りもどし勉強に励むことができたのは松本牧師のおかげです。／嵐が去ってみると学校の存在が世間に広く知られた結果となり、新しい学期毎に生徒の数も少しずつ増しました。³¹

ところで、建学の精神にかかわることであるが、1917（大正6）年9月、

²⁹ 真山光彌『愛知のキリスト教』243-244頁。

³⁰ 真山光彌『金城を支えた人々』30、146頁。

³¹ 坂井ふさ（鍵元）〔明治44年——1911年〕女学校、「祈りつづけた不敬罪事件の日々」、『金城学院創立百周年記念文集みどり野』64-65頁。

市村與市（1881-1953）が校長に就任し、就任直後に彼は私立金城女学校の標語（モットー）を明らかにした。当時の宣教師が報告した英文の『年報』によると、“The Head of This School is Jesus Christ, The Love of Jesus is the Life of the School”（「本校のかしらはイエス・キリストにして、イエスの愛は本校の生命なり」）とある³²。この表現通りではないが、同年定められた『指導綱領九則』の第1則には、「靈なる基督は全校の主にして、基督の愛は全校の生命たるべし」とあった。その後、1926（大正15）年には、「財団法人金城女学校寄附行為」が制定され（認可は1927年）、その第2条には「金城女学校ノ教育ハ永遠ニ基督教主義ニ依ル其教義ノ標準ハ日本基督教會ガ採用シタル信仰告白ニ依ルモノトス」とあった。

神社参拝と御真影奉戴 いわゆる天皇制の問題に気づきつつあったミッションは、1922（大正11）年の第36回ミッション年会で、「〔金城女学校・高知女学会・神戸神学校の〕理事会は、教師にせよ学生にせよ、敬意を表するために招魂祭または神社に学校を代表して参加することを認めない」と決議をした。

ところが、市村與市校長の外遊中かつL・C・M・スマイス（1883-1941）校長代理の入院・手術中であった1937（昭和12）年10月17日、国民精神総動員強調週間の一環として全校職員生徒が招魂社に参拝し、その後も、立て続けに神社参拝を行ったのであった³³。このことを契機に、ミッションは、金城との関係を公式に断絶することとなる。

御真影³⁴と教育勅語の奉戴式を行ったのもこの頃である（1938（昭和

³² 真山光彌「金城女学校の標語」、『金城台』第150号、1987年4月10日。

³³ 1938（昭和13）年3月10日の陸軍記念日の礼拝後、高女部職員生徒全員が招魂社に参拝、同年5月14日、招魂祭のため休業し、生徒代表が後藤邦四郎の引率で招魂社に参拝、さらに、同年6月21日の尚武祭の日に、柴田勝衛と後藤邦四郎が、生徒達の代表を引率し、熱田神宮を参拝。

³⁴ 御真影（天皇・皇后の公式肖像写真）は、学校側の「熱誠」あふれる願い出に対して、天皇の「優渥ナル思召」により「下賜」される仕組みとなっていた。しかし、15年戦争期になると行政的圧力により写真の受領を迫る事態も生じ、これは位

13)年10月27日)。栄光館(講堂)正面壇上中央には菊花紋章の奉安庫が整えられた。戦後、菊花紋は取られたものの、奉安庫は今も高校栄光館壇上正面の校旗の後ろに痕跡を残している(写真参照)。また同年12月2日には、寄附行為の改正に際し、文部省の指導によって、「教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ奉戴シ」という語句を第3条の教育目的に挿入した³⁵。



(金城学院中学校・高等学校 深谷昌一校長の許可を得て撮影。また、写真掲載をも許可してくださったことを、ここに記して謝意を表したい)

戦時下の礼拝と悔い改め 戦時下にあつて金城女子専門学校の市村與市は、苦渋のうちに神社参拝を認め、戦争協力(たとえば軍用機献納)を行うこととなった³⁶。しかし、「文部省及び陸軍省」より「単独面会をなし

階的秩序を梯子として「熱誠」あふれる願い出を引き出す従来の方式からの逸脱であつた(駒込武「御真影奉戴」をめぐるキリスト教系学校の動向——天皇神格化とキリスト教主義のはざま——, 富坂キリスト教センター編『十五年戦争期の天皇制とキリスト教』新教出版社, 2007年, 569-611頁)。駒込論文に掲げられた「表1 キリスト教系中学校・高等女学校(中学校・高等女学校に類する各種学校を含む)の『御真影奉戴』状況」(602-609頁)を見ると、多くのプロテスタント系学校には1930年代末期から1940年代初頭にかけて下付されたことが分かる。ちなみに、「下賜」された年月日が記された60校中、金城は34番目である。

³⁵ 『金城学院百年史』356頁。戦後の1946(昭和21)年になって削除される(428頁)。

³⁶ キリスト教学校歴史研究会編著『主を畏れる——資料に見る戦時下の金城学院と基督教』キリスト新聞社出版事業部, 2004年に、この頃の史料が収められている。

二時間に亘つて基督教を捨てる様に寄附行為及び学則を改正する様にと勧められた」時、これを拒否し、「戦時中でも毎日の職員及生徒の礼拝、早天祈祷会、聖書授業、伝導説教会等の宗教上の行事は一日も欠かした事なく行つた」との、戦後の報告記録がある³⁷。1945（昭和20）年1月の空襲によって校舎は栄光館を除いて全焼、その栄光館も3月の空襲によって大破するという状況下、疎開せず学校に残っていた高女部1年生約100名は、空襲警報に脅かされながらも授業、焼跡の整理等に励み、「斯くの如き状況下にあつても、日々の礼拝は厳然と守られてゐた³⁸」のであった。

空襲によって、動員中だった高女部1年生3人の殉職死をはじめ、30余名の生徒が自宅で死亡した悲惨な戦争は、ついに終わった。終戦直後、市村夫妻は宣教師へ私信を認めたが、その中で、学校の講堂、そして家庭が破壊された状態を前に、「衰えていない力で考えることは、これが神のみ旨だった、ということです³⁹」（市村秀野）と記した箇所がある。これは、宛先が宣教師であったことから推定すると、神社参拝等を神の裁きとして受け止めたことを示唆しているのかもしれない、とも言われる⁴⁰。1947（昭和22）年、南長老教会外国伝道局の使節団2人が金城を問安し、市村と面会することとなった。そこで市村は、学校の現状、戦時中の迫害、それにもかかわらず毎日礼拝を守っていたことを語った後、「見せ掛けの偶像礼拝を含む、神社への関係で取った姿勢について、深く恥じ入り悔い改めた」のであった⁴¹。ここから、金城とミッションとの関係が修復され、戦後の

³⁷ 同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会編『戦時下のキリスト教運動 2』新教出版社、1972年、334頁。

³⁸ 『金城学院六十年史』148頁。

³⁹ *The Presbyterian Survey*, June 1946, pp. 218f. (真山光彌『愛知のキリスト教』310頁より)

⁴⁰ 真山光彌、前掲書、310頁。

⁴¹ C. Darby Fulton, "Dr. Fulton's Report," For the Members of the Executive Committee of Foreign Missions: Narrative Report of the Executive Secretary to the Executive Committee of Foreign Missions on his Visit to the Far East in company with Dr. Wm. M.

復興を歩むこととなる。

4 金城学院大学のキリスト教の歩み ― 寄附行為・礼拝・授業

金城は戦後、新たな一歩を踏み出すこととなった。本稿の主題とかかわる点で言えば、1949（昭和24）年4月に英文学部英文学科の入学生15名を迎えて「金城学院大学」が、翌1950（昭和25）年に文科と家政科を置く「金城学院大学短期大学部」が発足した（名古屋市守山区大森）。以下からは、特に金城学院大学のキリスト教の歩みを、主として礼拝、授業といった事柄を通して見ていきたい。

4. 1 礼拝をどう整えるか

礼拝の変遷 大学設立直後の礼拝の様子がどうであったかはよく分からないのであるが⁴²、1960（昭和35）年の時点までには、「始業前に教職員礼拝、第一限の後に10分間の各学年科別の教室礼拝、水曜日は20分間の教職員学生合同の講堂礼拝が守られてい⁴³」たことが分かる。1962（昭和37）年以降変更が加えられ、「始業前に教職員礼拝、第一限の前に10分間の各学年科別の教室礼拝、水曜日は第一時限と第二時限の間に30分間の教職員学生合同の講堂礼拝が守られ⁴⁴」る形態となった⁴⁵。その後暫く基本的にこ

Elliott, Jr., May 1947, p. 21. (真山光彌, 前掲書, 311頁より)

⁴² 「伝道週間」の言葉は早くも1957年の時点で見出すことができる（『金城台』第2号, 1957年5月13日）。

⁴³ [リーフレット]『金城学院大学とキリスト教 1960』。[リーフレット]『金城学院大学とキリスト教 1961』では、「20分間」とあったところが、「30分間」に変わっている。

⁴⁴ [リーフレット]『金城学院大学とキリスト教 1962』。

⁴⁵ 『金城台』第26号, 1962年5月15日に、次のような報告がある。「一、本年度からクラス礼拝は一限のまえ九時から九時十分まで行うことになりました。礼拝におくれないように、またできるだけ静粛にお守りください。／二、英語礼拝は水曜日の合同礼拝の時間に、合同礼拝と別れて行うことがあります。英語礼拝の日時と場所はそ

の形態が続き、1969（昭和44）年時点でリーフレット『金城学院大学とキリスト教 1969』には次のように記されている。

所定の時間に行われる礼拝は、宗教教育を目的とする宗教行事であるので、学生は出席しなければなりません。／クラス礼拝 月・火・水・金曜日の第1限の前に10分間、各学科別クラス礼拝（放送礼拝）があります。／講堂礼拝 毎週水曜日、文・家政学部では第1限と第2限の間に、短大部では第2時と昼休みとの間に、それぞれ30分間の講堂（合同）礼拝があります。この場合、一年生に限り出欠を点検し、前期後期それぞれ礼拝回数の3分の2以上出席しなければなりません。礼拝出席回数が前期後期それぞれ3分の2に達しなかった場合には、次年度に必ず出席しなければなりません。

しかし、1969（昭和44）年度に学園紛争が生じ、そこで提起された問題⁴⁶を宗教センター委員会が「前向きに受け止め」、慎重審議の結果、1970（昭和45）年4月から、従来行われてきた「朝礼的・教育的礼拝」が「信

の都度、宗教課から発表いたします。／三、教職員と学生合同の早天祈祷会は月の第一週と第三週の水曜日午前八時十分から、本館中庭（雨天の場合は十八号室）で行います。どうか一人でも多く進んで御参加下さい。但し春と秋の特別伝道週間には、月・水・金の三日間特別に早天祈祷会を行います。／四、夏の学生修養会は大井の恵まれた自然のうちで、数日間生活を共にしつつ互に信仰の問題を考える機会です」。

⁴⁶ 提起された問題が何であったかは具体的には分からないが、「昭和四十四年、本学にも大学紛争の嵐が吹き荒れ、学生たちが『キリスト教主義とは何か』『大学とは』と問いかけてきた」ということなのだろう（真山光彌「真理が自由を」、『金城台』第128号、1981年10月10日）。また、同時代を感じさせる言葉として次のものがある。「会議のための出張から帰（ついで）り、私の研究室のドアにはりつけてあった〔金城学院大学学生会〕執行部のビラを読んだ。……ビラでの結論的な言葉として『それは、今や、名目だけの形骸化したキリスト教主義大学が、存在し得なくなりつつあるにもかかわらず、キリスト教主義大の看板、伝統を必死にたもとうとする矛盾なのだ』とある」（富田望「キリスト教主義大学について／金城学院大学学生会執行部の問いに答える」、『金城台』第77号、1970年6月25日）。

仰的目的をもつ礼拝」に改められた⁴⁷。すでに、学生たちが「放送礼拝を静かに守らなかったり、水曜講堂礼拝の時間に教室その他の場所に居て出席しない」ことの常態化も、この変更を後押ししたと言えよう⁴⁸。すなわち、従来の「職員礼拝」（8時45分～8時50分）と「放送礼拝」（9時00分～9時10分）を、教職員と学生有志による「礼拝」（8時45分～9時00分）へと変更、そして従来、全学生を対象に水曜日2回行われていた「講堂礼拝」（10時40分～11時10分、12時20分～12時50分）は、1年生を対象に毎週水曜日2限に「キリスト教の時間」として、年間主題を掲げ、講演、説教、音楽会、パネルディスカッションなどを行うようになったのである⁴⁹。

⁴⁷ 『金城学院百年史』778-779頁に記された礼拝理解の記述に依る。

⁴⁸ 特に放送礼拝については以前から問題視されていたようで、たとえば、1959年に行われた「宗教調査」では「放送礼拝に対する批判」が多くあり、「どうかこの放送礼拝がしずかに行われるよう皆さんも気をつけて下さい」と注意を喚起したことがあった（『金城台』第15号、1959年12月15日）。なお、一方で、「放送礼拝はとても効果があったように感じました」と回顧して、放送礼拝に対する肯定的評価もあったことを記しておく（三輪ふさ子（元本学教授）談、座談会「金城学院の第二世紀をめざして」、『金城台』第160号、1989年10月10日）。

⁴⁹ 『金城台』第76号、1970年5月1日に、「学校礼拝が大きく変わる／四月の新学年度から」と題し、次のように記されている。多少長いが、記録の意味も込めて、以下引用をする。「従来行われてきた放送による礼拝と水曜日の講堂に於ける礼拝は、その質において、方法において、四月の新学年度から大きく変わることになった。これは、一年余の時をかけて、宗教センターと合同教授会が検討した結果である。／まづ第一に、今までの放送による礼拝は廃止となった。この礼拝はもちろん宗教行事ではなく、キリスト教教育のためのものであった。しかし、「礼拝」という言葉が用いられていたために教会における礼拝や、キリスト教の信仰を持っている者、又は求道者の礼拝とまぎらわしくあり、今までも時々問題になっていた。／第二に、本来の意味における礼拝を月曜日から金曜日まで行うことにした。これは宗教行事である。したがって参加は全く自由である。細部は次の通りであり多数の方の参加を希望している。／一、日時 月一金 午前八時四十五分～九時／一、場所 図書館二階／一、参加者 学生、教職員 合同／本学教師、牧師の十分間のお話し。聖書、さんびか持参。／第三に、従来の水曜講堂礼拝の名称の変更〔、〕内容の大幅な変更、時間の延長である。ここでも「礼拝」という名称がいろいろと誤解をあたえてきた。いまでも、これはキリスト教教育のためのものであったが、今後は名称を「キリスト教の時間」として内容を一層充実したものとした。／内容の主なものは次の通りである。／・宗教主事によるキリスト教の本質に関する講演。その他。／・本学

寄附行為⁵⁰とその改正 寄附行為の大幅な改正が行われたのも、この礼拝改革の頃であった（1969年10月13日認可、1970年1月20日登記）。「学校法人金城学院寄附行為」は1951（昭和26）年3月に定められた。その第3条には、「本法人は福音主義の基督教に基き、且つ教育基本法及び学校教育法並びに私立学校法に従い教育事業を經營することを目的とする。／その教義の基準は明治廿三年十月旧日本基督教会大会において制定されたる左記信仰告白に準拠する」とあり、この寄附行為の最大の特徴は、続けて旧日本基督教会「信仰の告白」の文章がそのまま全文挿入されたことにある。これは、ミッション代表マキルエンとマカルピンの意見を汲んだことによる⁵¹。ここに、金城の福音主義キリスト教の規準が何であるかが明確にされていたわけであるが、その信仰告白が改訂に際して削除されてしまったわけである。しかし、信仰告白削除については、特に、次のように確認されている。

このたび寄附行為の第三条の条文中から、明治二十三年十月、旧日本基督教会大会において制定せられた信仰告白の全文を削除することにしたのは、斯かる長文のものを条文とすることは条文の体裁上からも相応しくないので、削除することとしたのに過ぎない。／決して、こ

教官、学外講師による人文科学、社会科学、自然科学とキリスト教の講演。文化講演。／・キリスト教音楽の会。キリスト教と演劇。／・伝道集会。クリスマス集会。／・パネルディスカッション。／・讚美歌練習。／なおこの「キリスト教の時間」は毎水曜日の第二限があてられ、一学年は他の授業はなく、したがって、一学年生は出欠の点検はしないが、出席の義務を有する。二学年以上も都合のつく方は出席することをすすめている。

⁵⁰ 本稿で既に建学の精神、あるいは寄附行為の変遷につれ触れてきたが、これらにはについては学院史の他、真山光彌「金城学院における一貫教育——伝統の継承をめぐって——」（『1983年度 第5回金城学院キリスト教科目担当教師研修会報告書』3-7頁）、柿沼敬一「学院における『キリスト教主義』についての経過」（金城学院宗教主事会編『1988年度 第10回金城学院基督教科目担当教師研修会報告書』金城学院大学内金城学院宗教主事会発行、1989年、8-9頁）等を参照。

⁵¹ 『金城学院百年史』476頁。

の信仰告白を忘れてしまったり、無視したり、或は棚上げにしまって、福音主義の基督教から後退するものでは絶対にない。／長文の信仰告白文を条文に掲げなくても「福音主義の基督教」の語で、金城学院の性格及びあるべき姿は判然としている。／金城学院の存する限り、金城学院は飽く迄この信仰告白を教義の基準としていくことは何等将来とも変わらないのである。⁵²

寄附行為第3条は、今も、この時のものを継承している⁵³。

礼拝改革後 『金城学院百年史』及び当時の文章の表現によれば、朝の礼拝（職員礼拝と学生対象の放送礼拝）は「朝礼的・教育的礼拝」から「信仰的目的をもつ礼拝」へと移行し、その出席は学生教職員の完全なる自発性に委ねられたわけであるが、その後の実態はどのようなものであったか。

⁵² 1969（昭和44）年5月20日定期理事会記録（『金城学院百年史』619頁）。信仰告白の削除は、「文部省が学院の信仰告白を削除するようという指摘」があったからだという（金城学院宗教主事会編『1992年度 第14回金城学院キリスト教科目担当教師研修会報告書』金城学院大学内金城学院宗教主事会発行、1993年、19頁）。

⁵³ ところで、寄附行為第3条について述べた、「金城学院の存する限り、金城学院は飽く迄この信仰告白〔＝旧日本基督教会信仰告白〕を教義の基準としていくことは何等将来とも変わらないのである」という表現に、次のような問題点の指摘があったことを記録しておく。「この点については問題が残る。なぜなら、当時の旧日本基督教会系の教会では、日本基督教団にせよ、日本基督改革派にせよ、あるいは〔新〕日本基督教会にせよ、それぞれ信仰告白をもつに至ったので、従来の寄附行為から旧日本基督教会信仰告白を削除する理由ができたとしても、これを将来も教義の基準としていくことは、理解しがたいからである。むしろ教義の基準は、『旧日本基督教会信仰告白、またはその伝統を継承している日本基督教団信仰告白に準拠する』といった方が、現実に適応するであろう。なぜなら、本学院に限ってみると、日本基督改革派教会の信者の方々にとっても、旧日本基督教会信仰告白の伝統を継承しているからである。／要するに、本学院の建学の精神を寄附行為という観点から見ると、法人の姿勢、または聖書・キリスト教学を教授する教義の基準は、旧日本基督教会信仰告白、またはその伝統を継承している日本基督教団信仰告白に準拠する、ということになる」（真山光彌「金城学院における一貫教育——伝統の継承をめぐる——」、『1983年度 第5回金城学院キリスト教科目担当教師研修会報告書』6-7頁）。

柳田知常（後の学長）が心情を吐露して次のように記している⁵⁴。「私の心にかかることは、学生の参加の少いことである。今のところ、十名前後、十数名、二十名足らずというのが実情である。在学生は三千人を越えるというのに、これは余りにも少数である」、だから、「放送礼拝に出席している学生を一〇〇〇人として、その大部分はいい加減に聞き流しているとしても、一〇〇人でも八〇人でもまじめに聞いている学生があって、その八〇人に福音が伝えられるならば、放送礼拝は廃止すべきではないのではないか」という、「S先生の言葉が改めてよみがえって来る。八十人と十人では八分の一である。しかも八十人というのは、ごく内輪の見積もりであった」と。水曜講堂礼拝の後継である「キリスト教の時間」についても、同様の傾向を示した⁵⁵。

学生が「礼拝からの解放⁵⁶」と呼び、それを享受した期間はそれから約15年間続く（後述）。この期間を過ごした卒業生の中には、キリスト教学校には入ったけれども、＜礼拝＞を知らないと言う人も多かったと思われる。しかし一方において注目すべき点は、この期間にあっても教職員による堅調な礼拝出席があり続けたことである。金城学院大学における礼拝の灯、ランドルフ時代にまで遡る毎日の礼拝という伝統は、教職員によって灯され続けたと言ってよい。2000（平成12）年に、「全学的礼拝参加の理

⁵⁴ 柳田知常「『放送礼拝』の廃止について」、『金城台』第77号、1970年6月25日。

⁵⁵ 「残念ながら学生諸君の参加は少ない、あるときは五十名に満たなかった。『これじゃあ、また出席でも何でもとって、むりやり聞かせようか。いや、再びあの非主体性の悪循環を繰り返すことはすまい』と自問自答している」（高橋敬基「宗教センターだより」、『金城台』第77〔実際は78であるべき〕号、1970年12月10日）。たとえば、1973年度の「キリスト教の時間」の場合、計26回行われたが、出席者数は1200→1100→800→1000→1000→400→250→250→700→350→600→500→110→210→238→278→102→267→260→240→314→175→265→82→38→330人であった（『1973年度キリスト教センター活動報告書』金城学院大学宗教センター委員会、3頁）。

⁵⁶ 「金城学院高校出身の一年生の中には、『礼拝からの解放』等とっているものがある。強制すると反発する例がある」（『1981年度 第12回金城学院大学教員聖書研修会報告書』6頁）。

金城学院大学におけるキリスト教教育の歩み

1日 礼拝 毎日（月曜日～金曜日） 8:45～9:00 （ユー・ストーンホール 礼拝堂）											
/ 教 務											
	月	4	5	6	9	10	11	12	2	平均	昨年 平均
教職員	199	409	406	281	316	355	237	318	98	291	318
学 生	267	283	186	86	139	109	77	62	15	136	108
計	466	692	592	367	455	464	314	380	113	4.27	4.26
回 数	11	21	20	14	16	17	13	16	5	15	15
1日平均	42	32	29	26	28	27	24	23	22	2.8	2.8

【1974年度キリスト教センター活動報告書】金城学院大学宗教センター委員会より。1日平均の出席者数は28人であり、単純計算をすると、学生の出席数は一日平均7人であったことが分かる。大学院・大学・短大の総学生数は3143人であるから、0.2%の出席率である。

想」を実現するため礼拝時間帯の変更の可能性が模索された際⁵⁷、教員と職員にアンケート調査がなされたことがあったが、（筆者が調べた限りでは）アンケートに答えた全ての職員が、「始業前以外の時間帯での礼拝の参加は仕事の都合上困難」であることを重大な理由として礼拝時間の変更に反対したのも⁵⁸、如上のような伝統を継承しているからかもしれない。

低迷を続けた学生の出席者数であるが、1984（昭和59）年に教職員のそれを上回り始め、一日平均の礼拝出席者数も（1970年度以降）初めて50名を越え、1992（平成4）年度には100名を越えるようになる⁵⁹。それは、宗

⁵⁷ キリスト教センター委員会（委員長 横手征彦）「＜自己点検・評価実施項目＞に向けて」、『金城台』第203号、2000年7月1日。

⁵⁸ 教員対象のアンケートには礼拝時間変更の検討の理由・経緯について記されていたが、職員対象のアンケートにはそれが記されておらず、「時間変更をする趣旨がよくわかりません、変更する必要があるのでしょうか」との感想・印象を持たれたことも、反対の回答が多かった理由にあるかもしれない。

⁵⁹ 金城学院宗教主事会編『1993年度 第15回金城学院キリスト教活動報告書』金城学院大学内金城学院宗教主事会、1994年、9頁。なお、1990年度～1991年度分は、手元に資料がなかった。

教主事たちが礼拝への出席を強く勧めた結果であった⁶⁰。1997（平成9）年から1999（平成11）年にかけて再び出席者数が減少した時、戸田安士（当時学長）は、「その理由は慎重に検討する必要があるが、ある程度のワクをはめてでも、本学独自の霊的教育の機会を体験させることが必要だろう⁶¹」と述べた。時代も変わり、学園紛争前後とは異なる、教育的礼拝理解が生まれつつあったことが分かる。それは、宗教理解が求められるグローバル化の進展がさらに推進されつつある時代背景と関連があるろう。

4. 2 授業・その他

キリスト教学と関連科目の拡充 次に金城学院大学におけるキリスト教授業の変遷について述べたい。大学の設立当初から、一般教養科目として

⁶⁰ 元々、専任教員としての宗教主事が担当するクラスの学生の礼拝出席者数は、非常勤講師が担当するそれと比べて格段に高かった（たとえば「1987年度 短期大学部1年生 礼拝出席状況（延人数）」）。少し時代が下るが、金城学院キリスト教科目担当教師研修会席上で、1991年には「例年になく礼拝の出席率がよい」（金城学院宗教主事会編『1991年度 第13回金城学院キリスト教科目担当教師研修会報告書』金城学院大学内金城学院宗教主事会、1992年、22頁）と言われたし、1992年にはその理由が次の様に説明されている。「次は大学の礼拝です。どこのキリスト教大学でもそうですが、学生を礼拝に出席させるのに四苦八苦しています。礼拝出席は、大学によっては、強制とか自由とかで行われていますが、学生の主体性を尊重し、礼拝を彼らの自由に委ねますと、礼拝出席者が少なくなるのは当然であります。／しかし、キリスト教教育も教育であるかぎり、強制は必要となります。だからといって、大学生を中高と同じように取り扱うわけにはいきません。／そこで、本学では有志の礼拝として、礼拝への招きを強く勧めています。それは、前宗教総主事の富田望先生の主張によりますと、イエスの『婚宴』のたとえ、『大宴会』のたとえのように、婚宴や大宴会の席上に無理やりに人々を招待した場面に似ています。このうちどれだけ、その意味を理解するか分かりませんが、私たち宗教主事は、そのような形で礼拝への出席を強く勧めています。最近、学生数が多くなりましたのは、このような次第だからです」（真山光彌「〔発題〕3. 大学」、『1992年度 第14回金城学院キリスト教科目担当教師研修会報告書』9頁）。

⁶¹ 金城学院宗教主事会編『1999年度 第21回金城学院キリスト教活動報告書』金城学院大学内金城学院宗教主事会、2000年、16頁。

「宗教学」2単位が開講されていた⁶²。『学生のしおり 昭和41年度』（金城学院大学）からも、「宗教学」が必修であったことが分かる。その後、「宗教学」は「キリスト教学」と名称変更する⁶³。どのような内容の授業が行われていたかであるが、履修要覧上では、たとえば、「前期<聖書の思想>」「後期<キリスト教倫理>」⁶⁴、「前期は宗教の意義を考え、旧約聖書にあらわれたイスラエル民族の宗教的価値を学ぶ」「後期はイエスの生涯を通して、新約聖書に示されている真理を思想史・精神史の立場から研究する」⁶⁵といった記録が残っている。その他の教員が担当の場合でも、概ね、前期・旧約、後期・新約という形態が多いように見受けられた。

ところで、金城学院大学のキリスト教科目は、長い間、（私の見落としが無ければ）「キリスト教学」だけであった。それは、金城が、伝道者養成の歴史を一切有していないところから、キリスト教神学の多様な科目を開講する機会を有して来なかったということも背景にあるのかもしれない。よって、「将来、選択科目として、キリスト教関係科目を置くことができたら⁶⁶」という声もすでにあったが、『金城学院新中・長期計画答申書』（1994年）に「キリスト教教育の充実」として「キリスト教科目の増設」が記されることとなる⁶⁷。そして2002（平成14）年に、「開学以来の大幅改

⁶² 大学設立時に認可された「金城学院大学学則」より（『金城学院百年史』465頁）。ただし、[リーフレット]『金城学院大学とキリスト教 1960』、同『1961』、同『1962』には「聖書学科」とある。

⁶³ たとえば、『学生のしおり 昭和45年度』（金城学院大学短期大学部）で、「キリスト教学」を確認することができる。もっとも、同一年度であっても学部によって名称が異なる場合もあるようである。

⁶⁴ 真山光彌「キリスト教学」、『昭和48年度 履修必携』金城学院大学家政学部。

⁶⁵ 笠井健一「キリスト教学」、『履修要覧 1986（昭和61年度）』金城学院大学・大学院・文学部。

⁶⁶ 真山光彌「〔発題〕3. 大学」、『1992年度 第14回金城学院キリスト教科目担当教師研修会報告書』11頁。

⁶⁷ 「キリスト教教育の充実／（1）キリスト教科目の増設／現在、学生が建学の精神に基づいてキリスト教について学ぶことのできる場合は、主として1年生が履修する一般教育の『キリスト教学』と1年生に出席が求められている『キリスト教の時間』

組」を機会に、「共通教育科目／総合教育科目」の中にテーマ「①キリスト教と文化」が設けられ、4つのキリスト教関連科目が開講されるに至った。そのほとんどを、専任教員としての宗教主事4名が分担して担う形であった⁶⁸。

ところが、最大で5学部4名いた宗教主事とその体制がその後維持できなくなり⁶⁹（2008年度途中は1名、2016年度現在も2名）、「キリスト教と文化」諸科目もまた従来の体制維持が困難になった。そうした時、2011（平成23）年度より、前述したように（2. 2 本学キリスト教教育の現状）、「建学の精神を学ぶ科目（金城アイデンティティ科目）」の「【テーマ1】キリスト教」内に必修の「キリスト教学」以外に、キリスト教関連科目（11種類）が開講された。その特徴は、各講義の多くが、宗教主事以外の、専任・非常勤のキリスト者（教職者、信徒）やキリスト者でない教員によって担われていることである。

その他 講堂礼拝の後継として毎週続けられてきた「キリスト教の時間」であるが、毎週の形態としては2001（平成13）年度をもって終了した。2002（平成14）年度からは現行のような頻度と形態となったが、「キリスト教の時間」の伝統は、キリスト教関連の多様な学びの場の提供という点では、2002（平成14）年度から開講の「キリスト教と文化」諸科目や、現在の「建学の精神を学ぶ科目（金城アイデンティティ科目）」の「【テーマ1】キリスト教」のキリスト教関連科目にもまた継承されていると言える。それにしても、多くの著名な方々を毎週のように招いての「キリスト

に限られている。この現状では、2年生以上の学生および大学院生は、自ら機会を求めない限り、キリスト教の接する場がほとんどない。／そこで、『キリスト教学』以外に、2年生以上の学生および大学院生が履修できる科目として、キリスト教に関する多様な科目を新たに設置する」（『金城学院新中・長期計画答申書』学校法人金城学院、1994年3月17日、17頁）。

⁶⁸ 『履修要覧2002年度』。

⁶⁹ 『DOUBLE JUBILEE 120/60 金城学院創立120周年・金城学院大学設立60周年』57頁。

教の時間」は、「本学が誇りとする独自のものであり、他のキリスト教主義大学に於いてもこれだけの規模と内容のものはその類を見ない、と言ってよいもの⁷⁰」であった。その約30年間の歴史を、本稿で十分に扱いきることが出来なかったのはひとえに筆者の力量不足に尽きる。

紙幅がいよいよ尽きてきたが、最後に、“社会との関わりで”の観点から一言しておきたい。戦前の金城の歩みを辿った中で、“社会との関わりで”という観点からは「地久節不敬事件」等について言及したが、戦後の金城の場合、あえて同観点から取り上げる点があるとすれば、1987（昭和62）年頃から学院内で起こった、国旗と元号の取り扱いについて議論が起こった点についてであろうか。大変興味深い事柄ではあるが、その性質上、年史に記されたことのみならず⁷¹、後々の経過、また現状をも精巧に調査した上で初めて論じることができるようになるものである。よって、ここでは、そのような議論があった、と記すにとどめておきたい。以上の歩みを経て、前述した「2. 2 金城学院大学のキリスト教教育の現状」に至っている。

5 おわりに

まとめ「礼拝は金城学院の命⁷²」である——金城の歩みから浮かび上がってくるのは、まさにこの一点であった。そして、印象的であるのは、その命が、特に教職員の先導によって受け継がれてきたことである（地久節不敬事件、戦時下、戦後の礼拝改革直後に、そのことは顕著であった）。そして、困難においても礼拝を絶やさなかった時、たとえば地久節不敬事

⁷⁰ 『センターニュース』金城学院大学キリスト教センター、第52号、1983年6,7,9月号。

⁷¹ たとえば、『金城学院百年史』741-744頁、『DOUBLE JUBILEE 120/60 金城学院創立120周年・金城学院大学設立60周年』33-34頁、等。

⁷² 『金城学院新中・長期計画答申書』16頁。

件に顕著であったと思うが、「嵐が去ってみると学校の存在が世間に広く知られた結果となり、新しい学期毎に生徒の数も少しずつ増しました⁷³」と当時の生徒は回顧したように、危機の後に発展を見たことである。興味深いのは、統計上からは実際には生徒総数に変化は生じていない。しかし、同時代人にとってそのように感じる何かがあったのであろう。それをやや簡便に標語としてまとめるとすれば、〈危機を発展・復興へと変えた要に礼拝と祈りがあった〉となるであろう。

しかし、その標語を、標語としてのみ受け取るだけでとどまってはならないであろう。なぜならば、その礼拝において拝まれる対象が何であり、また祈りにおいて何を祈るのかという、礼拝と祈りの中身の吟味を絶えず為されなければならないと思うからである。たとえば、戦時下の金城において語られてきた説教は何であり、教えられてきた祈りは何であったか⁷⁴。いや、現代も、「無宗教的世俗化（宗教よりはこの世の価値）と世俗的疑似宗教化（この世の価値を宗教化）⁷⁵」という時代にあつて、何が語られ、聞かれ、また祈られるべきかは、金城における全説教者、全礼拝者が吟味し続けるべきことであろう。

これから 最後に、今後、金城学院大学はどのような歩みをなすべきか。キリスト教主義を標榜している金城であるが、世間体からは、『『お嬢様大学といえば金城学院大学』というイメージが強固で、金城学院大学の『お嬢様』は『お金持ち』『派手・ブランド好き』……といったイメージを抱かれている。また……人格教育に力を入れているイメージは弱く、『キリスト教精神に基づいた教育を行っている』ということもあまり浸透してい

⁷³ 坂井ふさ（鍵元）[明治44年—1911年]女学校、「祈りつづけた不敬罪事件の日々」、『金城学院創立百周年記念文集みどり野』64-65頁。

⁷⁴ 同時代の雰囲気については、たとえば、『金城学院創立百周年記念文集みどり野』250頁等。

⁷⁵ 芳賀力「救済への問い その2 日本人の共同幻想」（季刊『教会』第102号、日本基督教団・改革長老教会協議会・教会研究所、2016年2月所収）、33頁。

ない⁷⁶」とされる。このイメージは、昔から変わらない非常に強固なものがある⁷⁷。客観的に見て、キリスト教教育を行う環境は、戦前よりも恵まれた時代状況に置かれている⁷⁸。それだけに、なお一層の、キリスト教の営為の充実が求められる。

教授する側・事務を担う側として、その鍵となるのは、礼拝又は祈りに基礎づけられた、キリスト者であるなしを問わない教職員一同の協働であろう。本稿ではほとんど触れることが出来なかったが、大学教員には「金城学院大学教員キリスト教セミナー」、事務職員には「金城学院事務関係者修養会」というプログラムがある。たとえば、前者は前身のものを含めるとすでに40年以上の歴史があり、2001（平成13）年までは一泊をかけて

⁷⁶ (株)新東通信によるアウトター調査（2004年8月25日）より。(株)新東通信は、「〔金城学院〕大学の理念、志を基に、『強く、優しく。』という教育スローガンを制定し、一貫した広告、イベントなどのコミュニケーション活動を通して、大学の魅力を学内外に発信して」いる<<http://www.shinto-tsushin.co.jp/topics/work11.html>>（2016年11月30日閲覧）。なお、調査資料の本稿への転載に際しては、総務部の許可を得ている。

⁷⁷ たとえば、昭和初期にも「おしやれで金がかゝる」と言われたり（澤田正子（昭和8年卒業生）「在校時代の思ひ出」、『金城学院創立百周年記念文集みどり野』242頁）、それは昭和後期も同様であった（今井光映（学長）は、「金城学院大生のイメージ——その真なるものを求めて——」、『金城台』第126号、1981年4月10日の中で、「金城学院大学、世評によれば『物質的に恵まれた家庭の子女が通う大学』であるとか、『お嬢さん学校』であるとか、表面的にとらえられ、評価されて」しまっている、という分析を記している。それをふまえ今井光映（学院長）は、「キリストの「かほり」を運ぶ金城学院大生に」、『金城台』第195号、1998年7月10日の中で、「金城学院大学生を社会一般が見る目の一つに、『ブランドもの所持志向』ということが言われます。このような目に見えるものによる特質の評価だけで良いのでしょうか。金城学院大学生の金城学院大学生であるゆえんは、愛そのものの神と、その愛の極致としてのイエス・キリストを、心の庭に迎え、心の中心に据え、慕う、そのココロの働きが、品位、気韻（アロマ）となって現れるところにあります」と訴え、述べている）。

⁷⁸ 「あえて宗教に関して言えば、戦後の日本人では宗教心が薄らいだ、すなわち無宗教の人が目立ってきた、という特色があるので、特定の宗教系学校に対する批判や干渉のなくなった時代でもある」（橘木俊詔『宗教と学校』河出書房新社、2013年、52頁）。

行われていた（但し2001年は台風で中止）。そして具体的教授のあり方として、課題を解決しつつのキリスト教関連科目の展開が見込まれる。

如上のような営為と共に、学生へは、昔からの変わらぬ課題である、2年生以上の礼拝出席がより盛んになることへの工夫を模索したい⁷⁹。そのことを通して、学生たちも、礼拝に「金城学院の命」があることを知り、礼拝を尊重していくものであって欲しいと願うところである。

学習と学生生活アンケート

《2012年度実施分と2015年度実施分との比較》

		2012年度実施分	2015年度実施分	
問 (キリスト教センター) 本学での礼拝は、あなたの人生において良い影響があると思いますか				
選択肢		/	回答数	回答数の比率(%)
1	良い影響があると思う		384	13.4
2	どちらかといえば良い影響があると思う		1,233	43.2
3	あまり良い影響はないと思う		518	18.1
4	まったく影響はないと思う		721	25.2
合計		2,856	100	

上に掲げた図は、大学履修支援センターで2015年度に2年生以上を対象に実施された「学習と学生生活アンケート」から、礼拝にかかわる部分の結果をまとめたものである。礼拝経験が、人生において良い影響が「まったくないと思う」「あまりないと思う」と答えた学生は、43%にもものぼる。筆者は、礼拝の言葉が学生に届いていないのではないか？と思う度ごとに、折に触れて思い出す次の文章を噛みしめる。

金城は昔からミッションスクールと呼ばれた基督教主義学校であるが、伝道週間だ修養会だという学校側の努力にも拘らず信仰を抱いて基督者になった人は極めて少なく大多数の人は卒業後教会や聖書から

⁷⁹ 1968（昭和43）年の文章にも、「二年生以上のチャペル出席のわるさ」についての言及がある（富田望「チャペル雑談」、『金城台』第64号，1968年5月3日）。

遠去かっているのが実情かと思う。しかし私は金城学院の学窓生活を通じて、はっきり言葉に現わした信仰ではなく具体的な神の助けの確信でなくても、すべての卒業生の魂の奥底に最も大切な人生観の基盤が造られていったのだということを知り非常に嬉しく思った⁸⁰。

かつてイエスは洗足の場面で弟子たちに対して次のように言われた。「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と（新約聖書「ヨハネによる福音書」第13章7節）——その意義は後になって分かってくるものであろう。それは、別の調査が明らかにしてくれている通りである⁸¹。金城の命としての礼拝を中心とした営みをする時、それがいつか、卒業生の命を支えることに通じる——そのことを信じつつ、祈りの心をもって諸課題に取り組み、務めを果たすものでありたい。

以上

⁸⁰ 村上忠敬「いしずえ——金城が生きている」（1976年10月15日、金城学院みどり野会修養会）、村上忠敬『秋津供養』編集兼発行者村上忠敬、中本総合印刷株式会社印刷、昭和52年10月30日所収、93-94頁。村上忠敬は天文学者、元金城女子専門学校教授（1932年4月～38年10月在職）。

⁸¹ 菅野幸恵「『卒業生調査』からみる学生生活」、『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第23号、2015年、51-65頁。この青山学院女子短期大学の年代別卒業生調査によれば、「キリスト教教育」の有意義性については、年齢を重ねるごとに微増することがうかがえるのである。